

C B I 学会会長
河合隆利殿

2010 年大会完了報告

はじめに

本年の大会は、東京千代田区一ツ橋の学術総合センター 一橋記念講堂で、9月15日—17日の間、予定どおりに開催された。これについて、以下報告する。

この大会の特徴

本年の大会は、30年におよぶこれまでの活動を検証し、これからも活発な活動を継続していくためには、活動目標と組織をどのように見直したらよいかを考える機会とすることを目的として企画された。そのために、この大会はいくつかの点でこれまでと違っている。

その第1は、主会場における講演やミニ・シンポジウムと、一般からのポスター発表に加えて、副会場における口頭発表のセッションを設けたことである。第2は、主会場での講演会やミニ・シンポジウムへの法人賛助会員に所属する者の参加を無料としたことである。これは、法人会員の研究者たちが、学会（大会）に参加する予算が非常に厳しく制限されるようになり、CBI学会の大会にも、参加し難いという事情を考慮したからである。ただしこれは、30年を記念した法人会員への特別な措置であった。第3は、海外からの招待（講演）者を一人だけに絞ったことである。それゆえ、講演会やミニ・シンポジウムの言語は、日本語とした。

講演と発表

本大会では、3つの基調講演、4つの特別講演、5つのミニ・シンポジウム、4つの口頭発表セッション、86のポスター発表、1つのランチョンセミナーと、7社の企業展示が企画された。これらのセッションは、すべて予定どおりに行われたが、第2日の中田力氏の特別講演と第3日の午後のミニ・シンポジウムのパネリストの鈴木香氏の参加が、健康上の理由から取り消された。招待講演者あるいはそれに準ずる発言者の数は、27名、大会関係者を含めたその他の参加者は、364名、うち有料参加者は、200名だった。

最新の結果が含まれている主会場での学術的な講演については、それぞれの領域の研究者の関心を惹く、満足すべきものであった。第3日の製薬会社の研究開発戦略と産学連携による医薬品開発の新しい潮流である **Open Innovation** と **Pre-competitive Research Collaboration** についてのミニ・シンポジウムは、研究者だけでなく企業の研究マネジャーらの関心を惹くものであり、製薬企業の関係者に、CBI学会を強く印象づけるものになった。一般からの口頭発表を主とする副会場のセッションは、席が足りないほどの盛況で、活発な討議が行われた。ポスター発表には、無料で飲み物が用意されており、例年のよう

に活発な討議がなされていた（ポスター賞受賞者は、添付資料にある）。

その他の行事

大会に先立って、会の活動 30 年を記念して、功労のあった佐々木浩二氏（株式会社アドイン研究所）、上林正巳氏（東京工業大学特任教授）に感謝状と記念品が贈呈された。また、大会の期間中に、2つの編集委員会、次年度の大会の準備会が開催され、終了後に総会が開催された。

Logistics と収支

当日の会場での手伝いを例外として、ほとんどの logistics は、CBI 学会の事務局スタッフが担当した。仕事は全体として平準化されていたため、効率的になされたが、厳しい経済状態と、製薬企業の構造改革により、展示企業が少なく、財務は困難を極めた。それでも、主会場の催しを、CBI 学会の月例の講演会と同じように、法人会員には無料とし、さらに、3日だけの参加費を特別に設定するなど、参加者を増やす工夫をした。一方で準備委員や座長らによる関係者への広報など、多角的な働きかけを行った結果、懸念された3日は、主会場がほぼ満席の盛況になった。またこうした努力で、大会への参加費を例年より伸ばすことができた。

記録など

今大会の記録は、ビデオ撮影はなく録音のみであったが、DBCLS（大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構 ライフサイエンス統合データベースセンター）の支援をえて、一部の講演を動画で記録した。後者は、内容確認した後、問題がなければ来年初めに公開してもらう予定になっている。

まとめ

本年の大会も、口頭発表のセッションを設ける、主会場に置ける催しへの法人会員の参加を無料にする、一部の動画の記録配信を試みる、など新しい試みを行ったが、運営上、とくに混乱はなかった。また、CBI 学会がどのようなことに挑むべきかについては、

（1）医薬品開発の対象が、低分子から抗体あるいは核酸医薬（biologics）に広がり、支援技術では、iPS 細胞利用など、細胞工学的な技術の応用に拡大している、

（2）シーケンサーの進歩が加速し、塩基配列決定の低コスト化と応用の拡大が続いているが、日本では研究への投資がなくなり、欧米や中国に大きく遅れてしまっている、

（3）製薬企業のグローバル化が加速し、研究陣に閉める外国人の比率が上昇し、英語での会議が多くなっているが、一方で研究者の国内での新規採用は激減している、

（4）CBI 学会の関心領域に関しては、欧州のビッグファーマが Pre-competitive Collaboration という新しい R&D モデルを実験している、またインシリコの仕事や、中国の専門会社に外注する動きもでてきている、

(5) スーパーコンピュータの活用について、さまざまな立場から意見が交わされ、次年度の大会への布石となった、
など、多くのヒントがえられた。

本大会は、「これまでの30年を振り返り、これからの30年を考える機会とする」ことを意図した開催されたが、所期の目標は十分達成されたと思われる。最後に本大会の準備から当日の運営まで、多くの関係者にご協力いただいたことに深く感謝します。

2010年大会実行委員長
中田吉郎（群馬大学）

添付資料：ポスター賞受賞者

最優秀賞（the Best Poster）

P1-12 Geometry optimization of CK2-ligand complexes using QM/MM calculations
Naoya Asada, Kazuo Kitaura
Graduate school of pharmaceutical Science, Kyoto University

優秀賞（the Excellent Posters）

P2-01 A Novel Ligand Mapping Method Based on Molecular Liquid Theory: Toward Computational
Fragment-Based Drug Design
Takashi Imai
RIKEN Computational Science Research Program

P4-03 Ligand-based analysis of new PAI-1 inhibitors by automated 3D-QSAR modeling tool
MOE-AutoGPA
Naoyuki Asakawa¹, Ryoichi Kataoka¹, Junichi Goto¹, Toshio Miyata², Noriaki Hirayama³
Ryoka Systems Inc.¹, Tohoku University Graduate School of Medicine², Tokai University
School of Medicine³

P7-04 Quantitative analysis of aggregation-solubility relationship by in-silico
solubility prediction
Tadaaki Mashimo^{1,2}, Yoshifumi Fukunishi³, Masaya Orita^{1,4}, Naoko Katayama^{1,4}, Shigeo
Fujita⁵ and Haruki Nakamura^{3,6}
BIRC(JBiC)¹, Information and Mathematical Science Laboratory Inc.², BIRC(AIST)³, Astellas
Pharma Inc.⁴, Astellas Research Technologies Co., Ltd.⁵, IPR(Osaka Univ.)⁶

P9-01 Robustness Analysis of the Budding Yeast Cell Cycle using An Integrative Mathematical
Model and gTOW Experiment
Kazunari Kaizu¹, Hisao Moriya², Hiroaki Kitano³
Keio Univeristy¹, Okayama University², The Systems Biology Institute³

P10-04 Strategy for Structure-Based Peptide Design
Junya Yamagishi^{1,2}, Noriaki Okimoto², Atsushi Suenaga², Mariko Okada³, Akira Imamoto⁴,
Makoto Taiji², Tyuji Hoshino¹
Chiba Unirnsity¹, RIKEN ASI², RIKEN RCAI³, Chicago University⁴